

釜ヶ崎越冬斗争をめぐる

問題点と総括 文責 (R)

1) 越冬斗争の目的

なぜ越冬斗争をやったのかといえば、敵の矢種攻め、切り捨て政策に対抗して「冬の陣」をはったということである。敵が青森の抽選で労働者を分断し、殺そうとするならば、仲間内の団結をもってまず青森の問題を解決し、黙って殺されるのではなく「生きて奴らにやり返せ」、つまり腹がへってはいくさなすべきこと、ギリギリの窮乏状態の中で「生きる」ことの息を吐く、闘うために食って敵に対する怒み、つらみを打ち固め、反撃すること、これである。

2) 総括

① 越冬対策としての敵の政治目的

まず敵の越冬対策とは暴動対策であり、その支配のカサメは分断支配とアメとムチである。今回の越冬は燃料不足、石油断続、食料不足を背景として極度のアツレ状況を生み出した。その結果「仕事よこせ」暴動が予想されたこと、これを機として敵と我々の政治方針がなされた訳である。

敵の政治目的が暴動対策であるならば、今回行政が千人規模の無手組泊施設を準備し、さらに10日までの延期要求をのんだこともこのハンデアップである。釜の労働者を「外」に分断し、「内」に抱いては西成署の暴力支配を貫徹する。4日以後は施設にせざることをだすことにより施設内部での分断を押し進める。これが敵の政治内容であり、

今回一定成功したといえる。

たといえる。

はたして我々は敵の政治をとれだけ打ち

破れたであろうか。

②我々は越冬斗争に勝利したのか

i) 行政斗争

敵が分断支配をやってくるならば我々は仲間内の団結を打ち固め、アメをだすならば反対にこれを武器に転化し、ムチで包囲するならば「外」と「内」とを結合し我々の暴力(武装)でもって対抗する。これが我々の路線である。

「仕事よこせ」斗争は特に今年のような不況期には全労働者的共感を呼び、敵の本質をつくものである。しかしそれが行政斗争の対集約されていく場合我々の斗争を左ヨク組合主義に押しもどしてしまう。行政斗争とは労働者なもつ即時的には改良意識を、肉体は全面的な現状打破を希求する、前者に依拠する斗争であり後者として表現される暴動は単に圧力としてしか意味されなくなる。

今回の越冬斗争においては各施設にオルケ団を送り込み「仕事を出せ」を主軸としつつ、タバコ、お茶、救世軍問題等の改良斗争をやってきた。しかしこれだけでは労働者の力量を全面的に開放させることはできない。労働者の内発的な怒り、つらみ、現状打破のエネルギーに依拠した内容で組織すべきであり、今回からは始めた意識変革と団結力を行政にだけ目を向けさせるのではなく釜に持ち返ることである。

大阪府労働部は仕事を出すであろうか。公共事業を起すことはインフレ抑止、公共事業引き締め政策と矛盾する。仕事を出すよりは同じ金を出すなら釜から「外」へ隔離する方が奴らの理にかなっている。「内」の労働者にはアフレ債をやればよい。

一方において労働部は釜だけでなくもっと広範な支配権を持っている。たとえば失対事業、出かせぎ対策(臨時工、社外工、季節工)、

部落産業等である。これら下層の矛盾を調整し、分断するのが奴らの仕事であること。このことをふまえて下層の問題をより明確に分析し、その矛盾を解決する方向で広範な戦線を構築しなければ、我々の行政斗争にすら勝利しえないと云うことである。

ii) 更生相・新党斗争

3日の大和中央病院、東成署斗争、6日の阪大斗争、7日の更生相斗争において我々は何を要請し、何を要求したであろうか。

一つとして釜における分断支配の力持ちは更生相(中更相)であること。「外」の無条件退治、新党、ことし精神病院、アフレ債すべて更生相を通じて行こなされる。更生相は単なる中更相ではなく、後にひかえる殺人病院、救世軍が牛耳る野郎権を考へると、差別者を隔離、分断、抹殺をはかる暴力闘争であり、ハイエス集団の元締めである。特に「アル中」として精神病院送りまわすのは保安、知分の先取りである。阪大の専ら、長が櫻井の先夫であり、元西成署長であるのをみる時、「市民社会」では、なにをいふ者の支配構造が下層においては植民地支配として毒々しく、きついていることがわかる。

我々は今ここにワシラ釜の労働者を直接支配し、奥の山へ撤退しようとする4つの敵を設定する。

①暴力支配の大阪府警西成署 ②市民生局=更生相(中更相) ③ 駈安、大阪府労働部→労働福祉センター ④ 殺人病院、精神病院、支配師、人夫出し、悪徳商人(トヤ生、飲みや、メシヤ)等のハイエス集団、これである。そしてこれらを元とし君臨する竹中、大林、鹿島、熊谷らの大手業者、三井、三菱の独占資本こそ現代資本主義体制をささえるすべての元凶である。

我々は、これらの敵に対し内なる斗争を組織倒して行くことのできるであろう。今回の越後斗争が暴動・宣伝として効果あったとしても敵への攻撃はまだまだピシタルものである。敵の「アウシュビッツ」的収容施設に隔たれている仲間と内と外との斗争を結合させ、権力機構の一部を、たとえ未端であろうとも、能麻痺にさせる様な斗争を組織しなければならない。敵の政治アランを^機混乱させ、権力機構を^{おろい}具体的に麻痺させる、そう言った権力斗争の内容をとたない限り、敵の政治を突破することはできない。

iii) テント村をめぐる状況

まず12月31日におけるテント村からの出撃に関して、二つの意見に別れた。一方は、労働者なやる気であるのだから出るべきで、出ないのは日和見主義であると言うもの。他方は、敗れるとわかる出撃はすべきでない。敵の攻撃に出た時まず最初に犠牲になるのは妊婦者、病・老・弱の労働者である。よって全体として呼びかけ出撃するのには賛同できない。最後までやり切ろうとする部分なヘゲモニーを取ってやるべきであると言うものがあった。

しかし問題は、こう言った表面的な問題をいかにと、と根本的な問題である。一つは労働者の政治意識と戦意の濃度の問題であり、単に気分に依拠する傾向は危険である。もう一つは釜共斗争自体の組織的課題運動に対する組織陣型の問題である。この問題をめぐりして「行く、行かない」の争いをやるのは消耗であるし、その結果として「ボリ公」に打ちられ、テント村への混入まで許してしまった原因である。

運動に関して言えば、対鈴木組以後の運動、斗争は具体的に敵、ボリ公、暴力手配師、悪貨業者、ヤー公との攻防であり、センターをめぐる支配・被支配の関係をなせる甲、乙政治目的であった。

運動時において

釜共闘はいつも後倒く回らざるをえず、飛躍が叫ばれていたにも関わらずその為の政治的意志一致も、中核部隊の編成、戦意の具体化としての武器に関しては何ら準備されてこなかった。対権力との力を突破するためにはいかなる組織陣型を準備していくのかと云う問題がまさしく現在出されているものである。

冬の寄せ場における労働者の実体的状況はおおまかに次の三つに大別できる。

まず暴動、メーデー時に推して中核を形成する若い戦闘的労働者は飯場に流れ、飯場を越え、ドヤをとってテント村へはあまりこない。若い労働者は多く、体も一丈丈夫であるがドヤ代、メシ代を奪われた労働者は無料宿泊所へ流れる。今回無料宿泊施設での改良要求を軸とした斗争が、労働者の団結を固め、意識改革をうながしたことは一つの成果であった。今回はこれを経験として敵が分断策動として設定した場を武器に転化し、反撃へまで高めるための布石とすべきである。暴動はテント村にとどまりメシを喰い、寝るだけで積極性を失っているいわゆる「くすぶる」である。我々は「くすぶる」であるからといって切り捨てておくべきではない。彼らが「くすぶる」のにはやはりそれなりの理由がある。それをときどきし、ねばり強い説得により、積極性をうながすべきである。

『としより、病人の利益をオーに考える』、『一人がみんなのために、みんなが一人のために』の作風は徹底されたであろうか。まったく不十分ではあったが、宿泊所で積極的に闘った部分、炊事、^{全体として}パドロール、いくつかの斗争に積極的にかかわった労働者の中にはそれがみられた。それらの労働者と今後とも結合し、さらに作風と規律をととのえられるか否かは今後の組織活動にかかっている。

釜共内部の問題も種々の矛盾として表面化した。これまでの釜共の斗争は半合法実力斗争であった訳であるが、敵のオラス張り弾圧の前に頭打ち状態にある。転機をむかえ、飛躍が問われている現在、矛盾を的確に把握し、分裂するのではなく大同団結する方向で解決すべきである。ただ云えることはこれまでのような一部 仲国内的、ホモオチ的結合を(狭党的)一歩押し進めた政治的結合を作らなくてはダメだということである。

3) 寄せ場反乱の飛躍とその方向

① 全国の寄せ場反乱の深化、拡大

2日に山谷、寿の仲間が釜の財政ピンチを聞きカンパを持ってきてくれた。今年は山谷・寿においても越冬斗争がなされた。全国の寄せ場斗争はそれぞれの斗争に学びつつ、特徴を考慮して一歩一歩着実に前進している。さらに全国の寄せ場に向けて寄せ場反乱を拡大・深化させねばならない。その時権力斗争の内実をもった「仕事とこせ」暴動の全国的な同時多発は敵の全国政治と対決する普遍性をもたせよう。

② 下月労働者の斗争の普遍性について

越冬カンパビラの内容に関して部落解放同盟浪速支部から批判があったように、現在我々の斗争内容の豊富化、普遍性が問われている。具体的には入管=民族、部落、アイヌ人問題であり、女性解放問題、出稼労働者、臨時工、社外工問題等々である。これらの労働者は釜ヶ崎労働者と近い状況を共有するかたまっていて労働者である。我々はこれらの労働者と共闘、連帯するためにはいかなる政治内容を持たねばならないのだろうか。今それが問われているのだが、現在はいまだ調査研究が足りず展開しきることができない。今後の重要な課題である。(別紙「越冬カンパビラに対する批判に答えて」、「女性同志への問題提起」を参照して欲しい)

③ 寄せ場における三つの戦闘領域と、三種の支援戦の本質に向けて
釜ヶ崎・山谷を中軸として即ち下月労働者の闘いの歴史
現在のスローガンの中心は、「やられにらみ阻止せよ。そして
その具体的な手段としての、この闘いを進めよう。その方向は
自らの斗争原理、組織闘争の原則に照らし

照らし存在する斗争は、三つの領域をその中心とする。一は合法斗争の領域であり、二は半合法斗争の領域であり、三は非法斗争の領域である。この三つの領域は互いに連帯し、三つの方向は、釜共内部に於いて互いに連帯し、一つの闘争の中心となる。緊密な連帯と、互いの闘争の領域の不安定性をとり除く。我々は、この三つの方向を、それぞれ別の方向に、その特性をそれぞれ自覚し、釜共内部の連帯の範囲に向けて前進させていく努力をし、連帯の範囲を拡大し、互いに連帯しつづける。

A. 合法斗争の領域である連帯闘争。連帯人民武装
闘争として、戦犯することは、アムネストイ・カニエリとてこの
闘争は、資本家行政のものを打ち壊すために闘争に
る法の下えまをとり、連帯闘争を市民社会の連帯をとり
暴力支配者、悪質業者を包摂することである。組合本有の労働者・土
木局を突き上げ、行政処分等のドウカツによって元職を連帯し、元
請けから下請けに波及させることに作戦闘争の特性としていることか
らみて、組合的狂ムとは寄せ場の労働者の政治性に対して大とヤクザ
が公然と工着できない状況をつくりだし、大と好き勝手に弾圧できな
いようにし、ヤクザを浮き上らして、大衆的に暴力支配者・悪
質業者を粉砕しやすい条件を用意することである。組合、組合的働き

には、これ以上のことはできず、またこれ以上のことをやろうとすると必ず大衆的な反動の状態をつくり出すことになる。何とすれば、組合の原理が一人一票の多数決原理を軸とするアルジョア的諸個人のアルジョア的利害の擁護を主目的とする秩序の組織であること、したがって組合的団結の中味もまたアルジョア的利害の共同体の様相を呈し、物を勝ちとってくれる組合執行部によってのみ活性化し、暴力斗争のための組織ではないからである。立派な組合執行部とは、資本家・行政からアメ玉をもらってくる指下部のことであり、のうがきばかりたれていてアメ玉をもらってこない執行部は、組合員から交代させられるのである。この組合運動は、アロレタリアートが資本主義制度においてはアルジョア的諸個人として歴然として生存している以上、十分な存在基盤があるのであり、われわれは組合のこの任ムの限界をよく理解し、敵に対する暴力戦体制の中にくみ込み、組合的任みを立派に遂行させて、早くその使命を終らせなくてはならない。

B. 半合法斗争領域である釜共闘の「やり返し」方は、とづかれた労働者の恨みを釜ヶ崎労働者全体の恨みに転化し、暴力支配師・悪質業者をセンター、大衆の中に引きずり込んで包囲粉砕する方法である。

釜共闘の組織原理は、多数決原理の執行部体制ではなくて、具体的な敵に対する怒り、恨みを感性的バネとする戦闘意志の一家族的連合集団であったし、持続的戦闘意志の中核体が指下部を構成してきた。

釜共闘的団結は、組合的信頼が「労災、賃金未払いを解決してあげる」こと、「アメ玉をとってきてあげる」ことを基調とするのに対して、労働現場で具体的な敵から同じ抑圧を受け、ともに苦しみ、ともに解決してゆくことによって生成する、兄弟的仲間内の結束である。

釜共闘の斗争原理は労働者の現状打破への暴力性、非日常の反乱的気

分に依拠し、戦闘形態な半合法斗争の領域であるが故に、明確な組織体制をとってはならず、あくまでボウヨウとした戦闘集団としてのみ存在意義を持ち、それ故に群集戦・防衛戦には力を発揮するが攻撃戦はとりえず、攻撃戦をとりえたとしても側面戦・一回戦断である。釜共闘の労働者の現状打破の暴力性に依拠した反乱の集団であることは、非日常には活性化するが、他方日常には組合的性格を持たざるをえず、不断に秩序の側へひっぱられ、オ一組合化し、権力に対しては無力化してしまう傾向を内容として持っている。反乱・暴動的釜共闘がこのまゝで組織性を付与されるということは、組合的組織性に墜落し、去勢され、反乱の障害物に転化してしまうことを意味するといってもいい筈ではないだろう。

釜共闘が、日常と非日常のダイナミズムの中で揺れ動く存在であることを確認できるならば、釜共闘の任みを次のように結論づけられよう。

①非日常にはすみやかに集中し、日常は分散し権力の集中監視をはずす。

②平時においては、賃金未払い、労災等の組合的任み、財政、救済等最低限度の組織体制の保持。

③大衆の中へ分散し、工作・情報集めを展開し、「労働・工作・戦闘」の自立した仲間の戦闘集団として集中する。

④群集戦・防衛戦を斗争戦断とし、むき出しにならず、常に労働者大衆の中にひそみ、大衆的に敵をやっつけることを追求する。

C. 非合法斗争における「やり返し方」は、攻撃戦でありしかも遊撃戦である。斗争形態は群集戦ではなくて組織であり、労働者の中に基盤をおき、明らかに区別された目的意識的戦闘細胞であり、団結の中味も、思想的に一致、革命への献身性を基軸とした戦士的団結である。日常の秩

序の明るく、しつめた輝きの地獄に耐え、非日常の狂熱の勝利にも賞め、
確実に目標を攻撃し、確実に退却する戦争の取人とならなければならない。
（なぞい多数の斗争であるがゆえに他の二つの領域を軍事の側面に引こ
て行く、あるいは納得させ支援させる普遍的な道理をどにかねばならぬ^ば、た
だ専ら行首のみがこの領域の存在を知らせる術であり、普遍的道理が付
与されていることによるのみ、労働者人民の納得をえられ、又彼等自
身が自らと「一人をやる」やり返し方を一人で、又仲間だけで行な
して行く事につながるであろう。この斗争の普遍化が、三つの領域が帝國
主義に対する総力戦として有機的に結合しうる環となるのである。

II、三種の支援の手段について

A、寄世場に一定期指定着し、下層労働者への「工作のスタイル」を身
につけていなくてはならない。釜ヶ崎に闘争がある時にのみ釜に来て
釜の活動家を全て面々にしている現在、敵の海の中で泳ぐことになる。
また寄世場労働者の一日は「現場-遊場-ドヤ」であり、斗争への社
評、反社の情報などをそこ語りぬるのである。活動家のパートナーで
釜の姿を知ることのみ継続しては、運動斗争としての真の支援体制、
連帯共闘体制が一面化してしまふ。自らが状況を分けていく力をつ
けてのみ、始めて真の支援体制が組めると思う。そのためこそ、この環境
に外形的に順応させること、一定期指定着し、労働者のハイパーの中
へ入って行くこと。髪形、衣類、けし物、言葉を順応させること。これが
工作者としての第一歩である。寄世場労働者はこと異なる者に対して
敏感であり、身だち態度を形にするのに不可能である。(次に続く)

B、単一的労働者、学生闘争への不断の情宣。Aの部分(労働者工作)
との連絡交換を打ち、その体制を確立する。釜共闘と公然と接触する
部分と、釜の中で押し声と挨拶としていられる部分との確立。この二つの

体制はくいと計り、この二つの部分を基軸、転回して行く。

C、以上二つの部分を軸にして、釜の三つ、全国寄世場労働者の三つ情
報を広範に労働者人民に知らせる活動をする。パンフレットの作成、出版物
の作成配布の系統の確立など、広範に労働者人民への情宣体制。釜ヶ崎
労働者と他地域の単一的労働者人民との交流の場の設定等。

(※ 課題をとって具体的に釜にかかわることによって、釜における
諸問題を調査、研究し分析すること。(入管・部局・保安官分
け解等))

以上三つの手段をとって支援体制を確立して行く事か、相互の三つを深
めて行くことと考える。恒常的支援体制の確立を強く訴えたい。

最後に

殺られ続けて来た労働者のウラをやり直には、10年、20年の三つが
必要だ。

血の負債は必ず同一物で返済せねばならない。

何日かだろうが、オトシ前に時刻は早い。

あしたのジョー達は、上昇思考のとりこになってしまい、再び下層へ
は帰ってこなかった。

あさってのジョー達は、^な自らは、自らの出身階級を裏切ることなかれ

(1974.1.10)

- 生きて奴らにやり返せ!。
- やられたら、やり返せ!。
- 一人がみんなのために、みんなが一人のために!。
- 「弱者」の力強い団結をもって、敵を打ちくだこう!。
- 殺られ続けてきた仲間のウラミをばらせ!。
- 釜ヶ崎解放!。
- 人殺し行政^{ミヤウダん}糾弾!。
- 殺人資本主義体制^{だとう}打倒!。
- 労働者のための、労働自身による政治を確立せよ。 倉
- 全口の寄せ場反乱の深化・拡大を推進せよ。